

核が検出され、他の時期に比べ接合する資料が目に付く、遺跡は小規模であるが、遺跡内で剥片剥離作業が行われていることが窺える。また、西大宮バイパスNo.5遺跡出土の台形様石器は、石器石

材によるためか第2地点出土の台形様石器に比べて、調整加工は平坦剥離のみで粗く、大きさに比べて薄手である。

(3) 環状ブロック群について

石器集中8~18は、径約15mの範囲に遺物の密集部が環状に並び、その周辺から多くの石器が出土している。密集部を石器集中とし、その周辺をエリアとした。石器集中は11箇所認められ、分布域全体を3つのエリアに区分した。この様な、遺物分布の在り方は、当該期に特徴的な環状ブロック群と呼称されている。

環状ブロック群は、群馬県下触牛伏遺跡で径約50mの環状に石器集中が分布するという、極めて特徴的な在り方から注目された。それ以後、類例が群馬県と千葉県を中心に発見されている。

橋本勝男は1989年に環状ブロック群を、後期旧石器時代前半（武藏野台地第2暗色帶中とその下層（第X層））に時期的に限られる。規模は大小に区分できる。他の石器集中と隔絶ないし孤立している。台形様石器を出土する遺跡と関連性などが指摘されている。現象面としての環状ブロック群の特徴は、ほぼ把握されている。

その後、環状ブロック群を「単位集団の一定期間内における生活の行動様式」（橋本 1989）の分析と解釈を主題に、狩猟・採集社会に於ける集団形態との関連が議論された。この魅力的なテーマを題材に、1993年に第1回岩宿フォーラム／シンポジウムで『環状ブロック群』—岩宿時代の集落と実像にせまる—、2005年に日本旧石器学会第3回シンポジウム「環状集落—その機能と展開をめぐって—」が開催され、他にも環状ブロック群を取り上げた論文等が多数出され、形成の要因について諸説が提示されている。小菅将夫はこれを「石器交換説」「祭祀場説」「外部警戒説」「紐帶確認説」「大形獣狩猟説」「折衷説」として整理

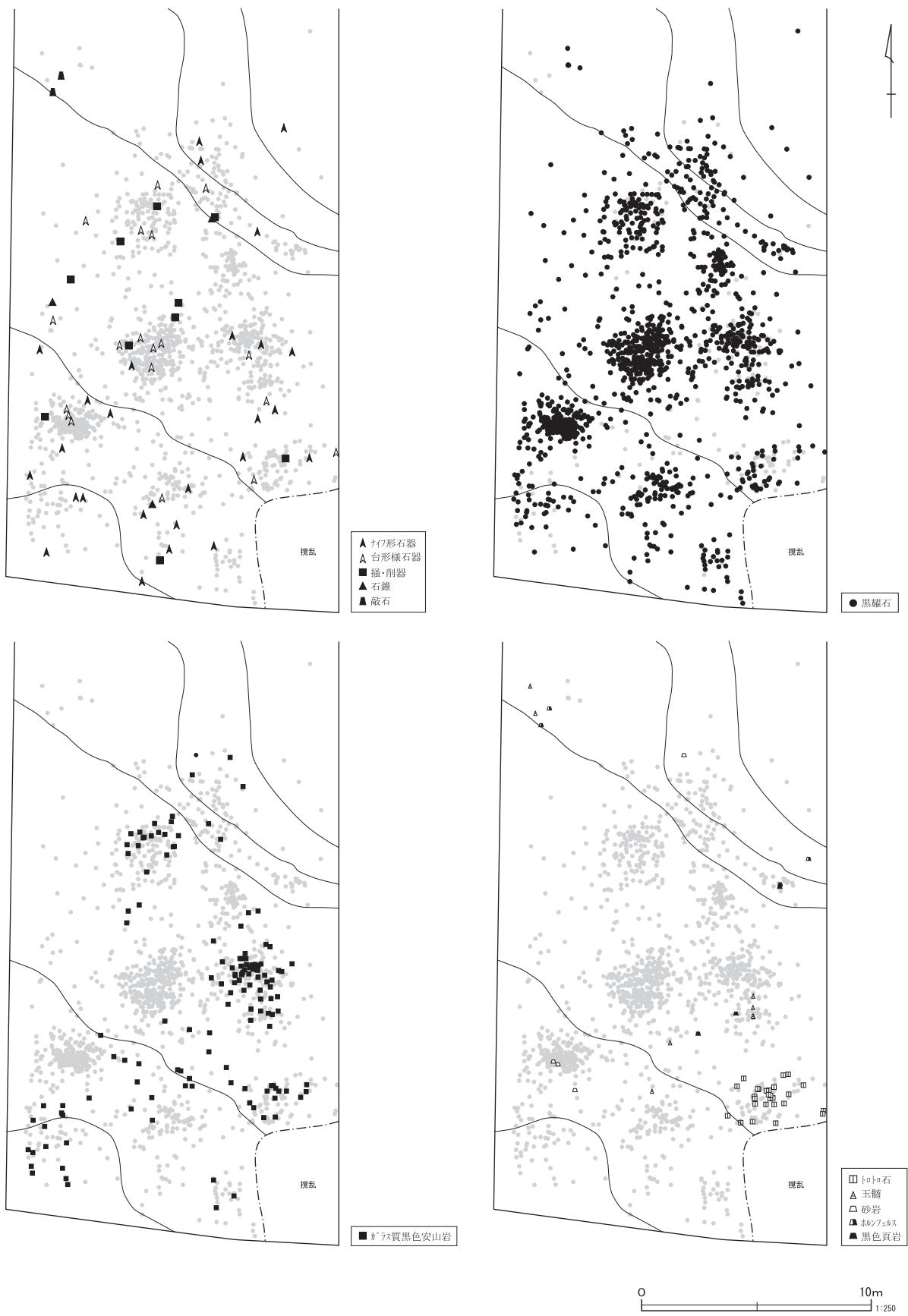
しており、形成の要因は一つではなく、重層的であるとしている。

栗島義明は「集団形態を遺物分布規模の大小へと直接的に対比する点の危険性」を指摘し、環状ブロック群すなわち大規模遺跡ではなく、遺物の点数及び遺跡空間での個体消費を比較することで、環状ブロック群を弁別する必要を説いている。その中で、環状ブロック群を集団統合の形態的反映と理解できるのは下触牛伏遺跡など限られるとしている。栗島は環状を呈する要因を、接合関係等からブロック群の形成が比較的短期間であること、多くの遺跡が石刃等の製作痕跡を留めないのでに対し、逆に環状ブロック群では石刃等があまり出土していない点に注目し「石材獲得のネットワークの中でこうした環状ブロック群を理解」（栗島 1993）し意識的に追及しなければならないとしている。

春成秀爾は大規模遺跡と小規模遺跡の関連を、集団の季節的離合集散と考えており、大工原豊は、環状ブロック群を大形獣狩猟のための季節的離合集散の結果としている。

橋本勝男は、後期旧石器時代前半を特徴づけるものとして、環状ブロック群と石斧をとりあげ、2つの関連に注目している。環状ブロック群における石斧の出土量は、規模に関わらず、ほぼ一定しており、例外的に多い日向林B遺跡等を除くと、石器の使用頻度が高く、環状部から出土する傾向が指摘されている。

小菅将夫は、環状ブロック群を規模によって、直径40mを超える大形、直径20~30mの中形、直径20m以下の小形にわけ、大・中形には中央部に



第207図 環状ブロック群の器種・石器石材分布

石器集中があり、小形のものには存在しない場合が多いとしている。例外としては、静岡県中見代第Ⅰ遺跡が挙げられている。

中見代第Ⅰ遺跡第V文化層は、A区の環状ブロック群に隣接してB区から石器集中1箇所検出されている。遺物の総数は1,856点でB区から65点出ているので、A区は約1,800点になる。器種組成はナイフ形石器1点、台形様石器18点、石斧4点等である。

大宮台地は当該期の遺跡の発見例が少なく、環状ブロック群は清河寺前原遺跡で初めての発見である。大宮台地と自然地理的に関係が深いのは、群馬県の赤城山南麓地域である。現在は埼玉県と群馬県の県境に利根川は流れているが、当時は大宮・館林台地として赤城山南麓まで一体の地域であった。その為、当該地域との比較が有効と考えられる。

島津秀章は、赤城山南麓地域に分布する、遺跡群の分析をとおして、環状ブロック群を直径約50m規模のものを大型環状ブロック群、直径約20m程度のものを中型環状ブロック群と区分し、前者は原産地が異なる石器の分布状況によって、分節化される複数の単位集団によって形成された遺跡として捉え、後者を单一原産地の石材を用いた単位集団とし、大型環状ブロック群を中型環状ブロック群の集合体として解釈している。

清河寺前原遺跡の環状ブロック群を、上記で検討した先行研究の成果と比べると、径約15mで小菅の小形、津島の中型規模であるが、遺物総数は約1,400点を多く、環状の中央部に石器集中が在る点は、小菅が例外とした中見代第Ⅰ遺跡と環状ブロック群と近似している。また、石器点数も中見代第Ⅰ遺跡が約1,800点、清河寺前原遺跡が約1,400点とほぼ同規模であり、津島が中型とした群馬県の遺跡群が400~500点程度である点とも異なる。ちなみに大形環状ブロック群とした下触牛伏遺跡が約2,000点である。

この様に、清河寺前原遺跡の環状ブロック群は、径は小さいが、遺物点数及び石器群の内容は、小形環状ブロック群に収まるものではない。

また、石器石材は、黒耀石が88%、ガラス質黒色安山岩9%、トロトロ石2%と黒耀石が主体を占めている。黒耀石は産地分析を行っていないので確定的ないことは言えないが、関東地域で良質(信州系)の黒耀石が多用されている遺跡は少なく、中部地域を含めて広範囲での検討が必要である。

次に、遺跡内でのToolおよび石器石材の分布をみて行くことにする(第207図)。

Toolの分布は、ナイフ形石器・台形様石器は大きな偏在はみられず、環状部と中央の石器集中から出土している。搔・削器は環状の北側部に分布が偏る傾向がみられ、中央の石器集中周辺に3点がまとまっている。石錐は点数が少ないので、分布の傾向と言えるかわからないが、環状の西側にそれぞれ離れて分布している。敲石は環状部から北側にやや離れた石器集中18から、2点近接して出土している。他の環状ブロック群でよくみられるToolの分布の偏在は、本環状ブロック群ではあまりみられない。

次に黒耀石の分布は、全体の88%を占めているため逆に偏在はみえにくい。全体の傾向としては西側に密に分布している。

ガラス質黒色安山岩は、環状部北側の石器集中11に密集し、北側の石器集中9とその周辺に分布のまとまりがみられる。南側は広範囲に明確な密集部を形成せずに分布している。

トロトロ石は、環状部の南西部、石器集中12にまとまり、分布の広がりはない。石器集中12はガラス質黒色安山岩も多く分しており、黒耀石の比率が52%と低くなっている。

その他の石材は、環状部にそれぞれの石材ごとに数点単位で、出土している。

主体を占める黒耀石は、大形の剥片類と石核・

原石が多く、接合の結果、原石の形状が想定できる資料（第129・131図）がある。また、剥片類の正面に自然面を残すものが多く、遺跡内でToolの素材剥片作出等の作業が活発に行われていたことが窺える。

以上、清河寺前原遺跡の環状ブロック群を概観したが、若干の整理をしておく。

環状の規模は約15mと小さいが、石器総数やToolの組成、中央部に密集度の高い石器集中を持つ点など、小形環状ブロック群の範疇で捉える事は出来ない。また、Toolの分布に偏在があまりない点、石斧を組成しない点など、多くの環状ブロック群と異なっている。それが、大宮台地の地理的特殊性なのかは不明である。

清河寺前原遺跡は、黒耀石原産地から遠隔地域

であるにも関わらず、黒耀石が多く出土している。接合資料及び、剥片類の正面に残された自然面の割合から、遺跡内で原石から剥片剥離が活発に行われていたことが窺える。

関東地域で、良質の黒耀石を集中的に利用している遺跡はあまり類例が無く、ナイフ形石器・台形様石器の特徴から中部地域を含めた広域で比較検討する必要がある。

大宮台地は当該期の遺跡が少なく、小規模である。その中で、清河寺前原遺跡の環状ブロック群は規模・石器群の内容等が突出している。現状では、資料的制約は大きいが、今後、清河寺前原遺跡と黒耀石原産地の関係、大宮台地内における清河寺前原遺跡の位置付けの2面性を検討していくなければならないと考える。

(4) 環状ブロック群出土の石器

清河寺前原遺跡の環状ブロック群で主体を占める石器石材は、良質の黒耀石である。

大宮台地の旧石器時代を通時にみると、遺跡ごとに黒耀石の使用に偏在が大きく、特に岩宿Ⅱ期は黒耀石を主体的に用いる遺跡と、ほとんど使われない遺跡がある。しかし、田代のI・II期、西井のI b・c期は、ガラス質黒色安山岩が多く用いられており、黒耀石は殆ど使われていない。関東地域に視野を広げると、下総台地では黒耀石を比較的多く用いられているが、殆どが高原山産黒耀石とされており、清河寺前原の黒耀石石器群とは異なっている。また、赤城山南麓は、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩が多用されており、黒耀石が主体遺跡は安中市古城遺跡、前橋市内堀遺跡、吉井町長根遺跡群が挙げられる程度である。

良質の黒耀石が主体的に用いられているのは、島田和高が「黒耀石利用のパイオニア期」で取り上げた、原産地遺跡の追分遺跡と消費地遺跡の野尻湖遺跡群がある。それに加え、山梨県の横針前久保遺跡と群馬県の内堀遺跡から、良好な資料が

出土している。

清河寺前原遺跡の黒耀石は、肉眼観察であるが、良質なものが多く信州系と思われる。今後産地分析を行い、詳しい検討を行う必要があるが、今回はナイフ形石器及び台形様石器の形態的特徴から、上記の遺跡と比較する。

清河寺前原遺跡はナイフ形石器26点、台形様石器19点の合計45点である。ナイフ形石器と台形様石器の区分は必ずしも明確ではなく、形態は漸移的に変わっており、便宜的に分類した部分がある。他の遺跡との比較の際にナイフ形石器と台形様石器をあわせて、検討して行くことにする。

ナイフ形石器・台形様石器の剥片素材は、縦長の剥片と貝殻状剥片がみられる。前者とナイフ形石器、後者と台形様石器の結びつきが強いが、台形様石器に関しては、素材剥片の用い方は多様である。ナイフ形石器と分類したものは、打面を基端面に残すものが多く、台形様石器は貝殻状剥片を、横に用いるものが含まれる。調整加工は、平坦剥離と微細剥離を主体であるが、Blunting加工